

考古学特殊研究 国分寺瓦の研究（8・9） 山陽道諸国における平城宮系瓦の展開

（梶原 2005 「山陽道・山陰道における平城宮系瓦の展開-6225・6663 系を中心に-」

『考古学研究』52-1）

◎西海道諸国の例から

① 国分寺と「在地系瓦」

国分寺造営初期段階には、周辺の在地寺院所用瓦の流用がおこなわれた。

② 国分寺瓦屋の成立過程

国分寺に多くみられる中央系文様をもつ瓦は、中央から直接入ったのではなく、一度在地寺院に入った文様が、在地工人の国分寺造営への参加の結果、国分寺にもみられるようになったにすぎない。

③ 国分寺瓦屋のその後の展開

国分寺創建時の瓦と修造期の瓦の系譜がつかない。

創建後、工人系譜は一度途絶え、修造時は中央からの工人派遣がおこなわれた。

これらの現象が、平城京と他の六道諸国の間ではどのようなものであるか？

◎山陽道を中心とした諸例

山陽道諸国

- ・ 8世紀前葉以降の瓦が多くみられる地域。
国府や国分寺ばかりでなく、駅家などにも瓦が葺かれる。
- ・ また、それらの瓦には中央系のものが多く、すべてをまとめて「国府系瓦屋」の生産品という枠組みの中で語られることが多い。
- ・ そして、それらの瓦の導入契機としては、**国分寺造営**にあったという考え方が主流となっている。
(今里幾次氏の研究・高橋美久仁氏の研究など)
- ・ それらの分布論的解釈は果たして本当に確かなのか？
- ・ 以上のことについて、文様の**型式学的組列**を追うことから検証していく。

◎備前・備中・美作などの例について

- ・当該地域には、平城宮 6225 型式・6663 型式とよばれる軒瓦と文様・技法とも非常に類似した瓦が、幅広く分布することで知られる。
- ・平城宮 6225 型式・6663 型式：平城宮第二次大極殿の主要瓦。
第二次大極殿は天平 17(745)年、聖武天皇の平城還都に伴い造営された。
しかし瓦の年代はそれより古くも解釈できる。
→天平 12(740)年以前に作られた瓦が「ストック」された可能性（佐川正敏氏）
- ・この系統の瓦は、当該地域以外にも、全国に多く分布することでも知られる。
駿河国分寺（片山廃寺）・上総国分二寺・伯耆国内諸寺院・丹後国府など。
- ・このことから、「国分寺造営に伴い地方波及した瓦であり、国分寺造営に対する中央からの援助の証拠である」と考えられてきた。

◎備前の瓦

- ・備前国分寺には少量。その他には、
幡多廃寺・賞田廃寺・堂敷山廃寺・北津高廃寺・香登廃寺：寺院
原遺跡・馬屋遺跡・南津高遺跡：官衙系遺跡など
川入遺跡：備中国府の外港
などで発見されている。
- ・初現：文様的にもっとも崩れが少ないのは、幡多廃寺・賞田廃寺の瓦。
それ以外の瓦はいずれも、それを**順次模倣した形での文様変化過程**として解釈。
- ・その意味：
幡多廃寺・賞田廃寺は、いずれも7世紀後半より続く、在地有力氏族の建立寺院。
その改修瓦として、6225－6663 型式が導入されている。
→備前における導入契機は国分寺ではなく、むしろ在地寺院であり、
周辺諸官衙や国分寺は、幡多廃寺・賞田廃寺で造瓦に携わった工人の移動、
またはそこからの製品供給の結果として、当該型式が導入されたにすぎない。
＝西海道諸国国分寺における老司式・鴻臚館式の例と同様。

◎備中の瓦

- ・備中国分寺の他には、

栢寺廃寺・箭田廃寺・岡田廃寺・占見廃寺・柿梨堂廃寺・八高廃寺・関戸廃寺
：寺院

毎戸遺跡・矢部遺跡・津寺遺跡：官衙系遺跡など

二子御堂奥窯：窯跡

などで発見されている。

- ・軒丸瓦は横置型一本作りであり、また軒平瓦の中心飾りの変化の仕方が備前とは異なることから、備前とは別系譜のまとまりと考えられる。

- ・初現：文様的にもっとも崩れが少ないのは、栢寺廃寺および二子御堂奥系の瓦。それ以外の瓦はいずれも、それを順次模倣した形での文様変化過程として解釈。

- ・備中国分寺の瓦

軒平Ⅰ型式：栢寺同範だが、量的に僅少であり、また対応軒丸瓦を伴わない。
→栢寺廃寺からの製品供給か。

軒平Ⅱ・Ⅲ型式：備中国分寺の主要瓦。Ⅰ型式より文様的に後出。

軒丸瓦は6225系ではなく、異質な文様を採用している。

さらにその後出型式が、関戸廃寺に入っている。

- ・備中においても、平城宮系瓦の採用契機は国分寺ではなく、いずれも7世紀からの伝統的な在地寺院や窯であったことが判明した。国分寺や諸官衙・寺院に入るのはその後出型式。

- ・しかも国分寺では、あえて軒丸瓦の文様を変更しており、それはむしろ平城と同文の瓦を避ける意識とも解釈できる。

◎美作の瓦

- ・備前・備中とは異なり、国府・国分寺で主体的に使用される瓦。その他には、
今岡廃寺・久米廃寺：寺院
平遺跡・大田茶屋遺跡：官衙系遺跡など
などで発見されている。
- ・初現：文様的にもっとも崩れが少ないのは、国府の瓦。
- ・系譜：中心飾り花頭の扁平化、文様全体の横への間延び、左支葉反転の是正など、
備前賞田廃寺の瓦との近縁性がみられる。
ただし、技法的には、顎下部に面取りをもつ「曲線顎Ⅱ」であることなど、
備前とは異なる面もある
→美作で唯一「曲線顎Ⅰ」である今岡廃寺の瓦の位置付けを考慮する必要。
- ・国分寺の瓦：
国分寺ⅠAは国府同範だが、箔割れをおこした個体が国分寺にはみられ、
国府→国分寺への範移動が想定される。
ⅠAを模して、軒丸瓦ⅠB・ⅡA～B、軒平瓦ⅠB～Eが製作される。
軒平瓦の顎が強調され、段顎状になっていく：平城にはない変化
軒丸瓦は単弁化。
- ・国分寺系瓦の展開：
国内各寺院・遺跡の瓦のほとんどは、国分寺と同範関係をもつ。
異範である平遺跡の瓦も、軒丸瓦の単弁化など、国分寺と深い関わりのもと
変遷をしていることがわかる。
- ・まとめ：
 - 美作においては、(おそらく)国府の造営にともなって平城系瓦が採用された。
 - その系譜は、平城から直接ではなく、備前経由の可能性もある。
 - 国内諸遺跡の瓦は、すべて国府系瓦屋の産あるいはその強い影響のもとにある。

◎結論

6225—6663 系瓦の導入契機：

国分寺造営ではなく、むしろそれ以前、8世紀前半段階の在地寺院の造営（修造）にあるという、従来論からはむしろ反証的な事実が導き出せた。

国分寺にみられる当該系瓦は、それが在地で変容した後出のもの。

→「国分寺は在地の資力で」という論を補強する材料。

*この結論を導くにあたり、覆さなくてはならない旧説など

①「官寺的役割」「国府寺」「国分寺前身寺院」などの概念

備前幡多廃寺・賞田廃寺・備中栢寺廃寺など、平城系文様の瓦をもつ寺院は、いずれも「官寺」的役割を付与された寺院であるという考え
(高橋美久二氏など)

それらの論拠の大部分が、中央系の瓦当文はまず官営施設に採用されるべきという、瓦当文に公的色彩を過剰に投影した大前提のもとでの議論。

平城宮からの6225・6663型式導入の初現が、備前・備中ともに「明白な官営施設」ではなく、七世紀から続く在地寺院にあることは重大。

②分布が国境を越えない故、国司が生産供給に関与した国府系瓦との考え。

(上原真人氏など)

7世紀後半～8世紀前半の官系以外の瓦にも国境を越えない例が多い。

備中式・伊勢天華寺系列・下総龍角寺系列など。

それと同様に、文様が中央系といって、備前系や備中系の瓦のみを

その分布状況から国府系と断じるのは整合性がとれないと考える。

③他地域の6225・6663系の瓦について

上総国分二寺：文様退化が進み細弁状になった6225系と、

6663よりは年代が下る、曲線顎の軒平瓦6691系が共伴。

片山廃寺：6663系の初現とされる瓦に6225系は組み合わない。

また6663系の顎形状も曲線顎に似ている。

さらには寺院自体が現状駿河国分寺とは断定できていない。

これらの国については、備前や備中の6225・6663系瓦より時期がくだる。